

# 新潟県・八海山を対象とした山岳信仰の展開

— 大崎口崇敬者の分布を中心に —

阪野 祐介

- I. はじめに
- II. 八海山信仰の変遷
  - (1) 開山以前の様相
  - (2) 開山以降の様相
- III. 八海山信仰の分布
  - (1) 大崎口崇敬者の分布
  - (2) 大崎口周辺の霊神碑から見た分布
  - (3) 八海山信仰に関わる講の分布
- IV. 八海山信仰の展開と分布要因
- V. おわりに

## I. はじめに

山岳信仰を対象とした研究は、様々な分野・視点で行われてきた。その中の一つに、分布・伝播を扱った研究があり、地理学では、主に信仰圏に焦点を当てた研究がなされてきた<sup>1)</sup>。主なものとして石飛<sup>2)</sup>、岩鼻<sup>3)</sup>、松井<sup>4)</sup>、金子<sup>5)</sup>等の研究がある。石飛は、現在議論されている信仰圏とは性格が異なるが、地理学における山岳信仰を対象とした分布・伝播についての研究の方向性を与えたと言える。岩鼻や金子は、山岳信仰の地域構造の解明として、信仰の空間的広がりを提示し、複数の指標により地域区分を行っている。松井は、山岳信仰以外の信仰においても同心円構造としての信仰圏を設定することができることを示した。しかしこれらの同心円構造を用

いた信仰圏研究では、そこで示された構造の歴史的な形成過程や、その構造によって示される信仰の空間構造の形成要因については、十分に解明されたとは言い難い。

これに対して、信仰の浸透過程の違い、講の成立過程や要因等は各地域によって異なり、むしろ信仰の受容要因等を地域ごとに分析する必要があると主張する立場がある。この視点としては、三峰信仰を対象とした三木による一連の研究が挙げられる<sup>6)</sup>。この主張については、金子もまた「モデルばかりではなく、そこに宗教的、社会的な諸状況がどのように関わっているかを、明らかにする」ことが重要であると指摘している<sup>7)</sup>。こうしたことから、受容地域における既存宗教を含めた文化的・社会的諸状況がどのように関わっているか、また信仰の伝播の類型やプロセスを検討し、その分布・信仰圏の形成要因を明らかにすることは重要と考える。なぜなら、信仰というものは、各受容地域の様々な要素との関連の中で浸透していくものであると考えられるからである。

信仰圏研究においては、前者の立場により地域区分を行うことで、信仰の空間的広がりの特徴を明らかにでき、また一方で、三木のように受容する側の要因に注目することは、信仰受容の地域差を明らかにしていく上で有用であろう。しかしながら、本稿で注目した

キーワード：山岳信仰、信仰の分布、行者、八海山

いことは、信仰の分布の形成過程、分布の全体像としての形成要因にある。従来の研究において宗教あるいは信仰の分布・伝播を考察する際は、伝播・浸透の過程において、信仰を受容する側の人と信仰との間に介在し、信仰を広める立場にある布教者に対しては、その役割が重要であるにもかかわらず、検討が不十分であったように思われる。従来の山岳信仰の分布に関わる研究においては、信仰を広める側として寺社が取り上げられてきたが、直接に信仰の拡大を担った行者の活動にも注目する必要があると考える。特に、本稿の対象地域を含む中部地方では、木喰行者<sup>8)</sup>が、衰退しつつあった山岳信仰を復興し、霊山を民衆に開放したことが、大きな特色の一つとなっていると指摘されている<sup>9)</sup>。

本稿で対象に挙げた八海山信仰に関する研究は、主に民俗学において行われてきた<sup>10)</sup>。鈴木は<sup>11)</sup>、八海山信仰の展開を宗教組織の機能に注目して分析し、近世末の八海山信仰の発展に木曾御嶽信仰が影響していることを指摘した。宮家は<sup>12)</sup>、御嶽信仰の浸透が八海山信仰の宗教組織の機能・構造にどのように影響を与え、また御嶽信仰が八海山山麓においてどのように浸透したのかを宗教組織の動向を中心に分析している。すなわち、主に八海山信仰の歴史の変容に加え、八海山信仰における宗教組織の機能と構造の解明に収斂していると言えよう。このように八海山信仰に関する研究においては、その分布・伝播という視点での分析が不十分である。

そこで本稿では、中部霊山の一つである八海山を対象として、信仰の歴史的展開のみならず、布教主体の一要素である行者の活動、八海山の山麓部に建立されている霊神碑の分布等に注目し、八海山信仰の分布の特色と分布要因について考察することを目的とする。

特に本稿で取り上げたいのは、開山以降の展開であるが、ここで八海山信仰に関して、注目すべき点がいくつか挙げられる。一つ

は、鈴木や宮家が指摘するように<sup>13)</sup>、木曾御嶽信仰の影響である。八海山信仰が大きく展開することとなるのは、近世末期の開山以降であるが、この開山を行った行者が、木曾御嶽の玉滝口を開いた普寛である。そのため、八海山信仰の開山以降の展開に関して考察を進める上で、木曾御嶽信仰の影響は、無視することのできない要素の一つと考えられる。また木曾御嶽信仰の影響に関連して、霊神碑の建立についても注目する。詳細については後述するが、霊神碑建立は、八海山信仰および木曾御嶽信仰に見られる特有の習俗であり<sup>14)</sup>、八海山の山頂から山麓部にかけて数多く建立されており、この碑に刻まれている建立者および霊神の出身地、建立年代を八海山信仰の展開を検討するためのデータのの一つとする。この霊神碑のほか、八海山大崎口社務所の「八海山大崎口里宮崇敬者名簿」（以下「大崎口名簿」）<sup>15)</sup>、講の分布<sup>16)</sup>を資料として用いる。

## Ⅱ. 八海山信仰の変遷

### (1) 開山以前の様相

本稿で取り上げる霊山・八海山は、新潟県南魚沼郡六日町と同大和町の境界に位置し、これに続く中ノ岳、駒ヶ岳とともに魚沼三山、あるいは越後三山と称されている。

日本では古くから山を神とする観念が各地にある。この観念のため古代の人々は登拝することはなく、山麓から遥拝するにとどまったという<sup>17)</sup>。原初的な山岳信仰では、山は主に農作を守る作神や水分神として崇められることが多く、八海山も例外ではない<sup>18)</sup>。八海山においてこうした信仰内容は、今日でもなお伺い知ることができる。その一つに、八朔祭がある。八海山の信仰登山が八朔の日に行われていることは、八海山神が農民にとって作神として信仰されてきたことを意味しよう。

その後、山岳信仰は全国的に大きく変化する。中世に入ると、山岳信仰の仏教化が進

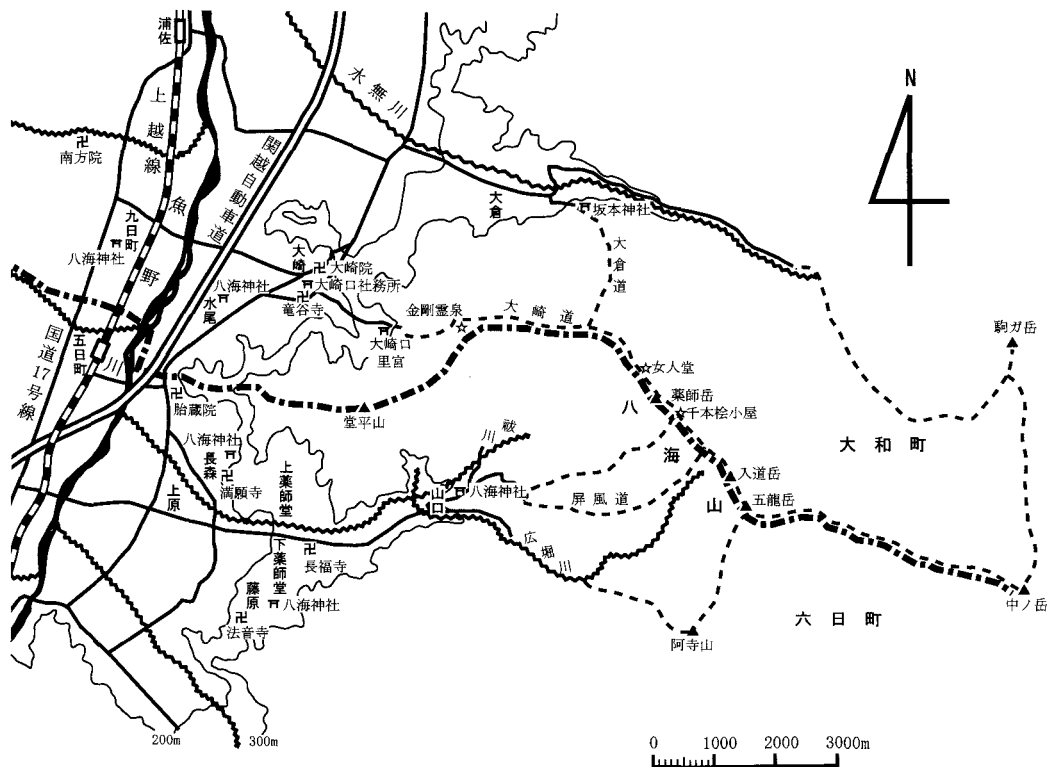


図1 八海山および山麓略図

表1 八海山山麓の寺院

所在地	寺院名	宗派	備考	
六日町	藤原	報音寺	真言宗	
		亀福寺	真言宗	
		泉福寺	真言宗	
	新堀新田	延命院	真言宗	
	岡	栄久院	天台宗	
	上薬師堂	長福寺	真言宗	
	下薬師堂	薬師堂	真言宗	
上原	薬師堂	真言宗	法音寺末	
	下原	西珠院		真言宗
		玉泉院		天台宗
長森	善照院	曹洞宗	大崎院末	
		満願寺		真言宗
京岡	薬師堂	真言宗	竜谷寺末	
大和町	一村尾	南方院	天台宗	
	水尾	胎蔵院	真言宗	
		薬師堂	真言宗	
	大崎	竜谷寺	曹洞宗	
	大崎院	天台宗		

資料：南魚沼郡教育会『南魚沼郡誌』，大正9年

み、修験道が成立する。古代の原初的の山岳信仰が行われている地域へ仏教が伝えられることにより修験道は生み出されたわけである。また修験道は、原初的の山岳信仰と仏教の密教的要素が習合した宗教であり、霊山だけではなく、山伏に対する帰依信仰をも指すものである<sup>19)</sup>。行者である山伏は、山岳に登り修行を行い、験力を体得し、祈祷師や呪者として民衆に崇敬された。

八海山信仰においても同様に、仏教化は進み、八海山の山中や山麓に祠や仏寺、仏堂といった宗教施設が建立されることとなった。図1および表1に示した山麓の六日町と大和町における八海山信仰に関わる寺院・仏堂を見ると、六日町では旧三国街道(現・国道17号線)から登拝口の山口に至る道中に、上薬師堂の八海山長福寺や、下薬師堂・上原・京岡・野田に薬師堂が確認できる。大和町では、大崎の八海山竜谷寺がある。現在では八

海山信仰との関わりは認められないが、山号が八海山であり、古くは八海山と尾根続きにある堂平山中腹に位置し、水尾から八海山への中世の古道沿いにあったとされ<sup>20)</sup>、八海山信仰と関わりがあったことが推測できる。

中世における信仰の拠点は大和町側であると考えられている<sup>21)</sup>。このことについては、八海山の本地仏が薬師如来であることから、山麓において薬師如来が祀られている寺院により、推察することができる。表1より六日町では、上述の長福寺や3ヶ所の薬師堂が確認できる一方で、大和町では、水尾の薬師堂のみである。また長福寺は開基年代は不詳とされているが、その本尊の薬師如来は室町時代のものでされている。そのため、中世における八海山信仰の拠点が六日町、特に長福寺であったと考えられているのである<sup>22)</sup>。しかしながら、八海山信仰が、山麓部を除いて、どの程度の範囲にまで浸透していたかは確認できない。また、近世期に入ってから、普寛によって開山されるまでの間は、それほど山岳信仰として八海山信仰が興隆することはなかったとされる<sup>23)</sup>。

## (2) 開山以降の様相

八海山信仰は、近世末期に転換期を迎えた。その展開は、普寛や泰賢らによる開山に始まる。普寛は木曾御嶽の王滝口を開いた行者であり、またその弟子の泰賢は、大崎(図1)の出身で、現在の大崎口を開いたとされる行者である<sup>24)</sup>。

八海山の開山は行者普寛を中心に寛政6(1794)年6月になされた。八海山開山について記したものに『八海山開關傳紀』がある<sup>25)</sup>。これによると、普寛は隨身として江戸から3人の行者とともに来越し、堀之内の五十嵐多三郎、山口村の万左衛門、半右衛門、伝九郎、大崎村の泰賢を伴い、屏風道を開削し、開山がなされたとされる。この『八海山開關傳紀』は、弘化3(1846)年5月に木喰行者

普明が書き記したものであるが、そこには「御嶽山八海山武尊山中興開關」を行ったとして「大木喰行者普寛 二代 泰賢」と記されている。普寛は、『八海山開關傳紀』に記載されているように、八海山のほか、木曾御嶽や上州武尊山の開山も行っている。そうしたことから、少なくとも木曾御嶽、八海山、武尊山の三山の信仰に関連性があり、この三山を重要視していたことが推察できる。

これら行者の活動に伴い、八海山が霊山として民衆の間に広がることとなり、山麓部における各神社の活動も活発化することとなった。ここでは神社の活動の一つであった登山道の開削から、その様子を見てみる<sup>26)</sup>。図1に示した八海神社8社(坂本神社を含む)のうち、登拝口となる神社は、大和町大崎、大倉、六日町山口の3社である。

大崎登山道の最古の道は、中世以来のもので、水尾船岡山・堂平山・猿倉山とたどり、尾根を伝って延びていたとされる。その起点には、大崎の南西に隣接する水尾の八海神社があり、創立は建治2(1276)年とされるが、現在では、この道は廃道となっている。おそらくは、堂平山中腹にあった六万寺(現・竜谷寺)が天文年中(1532~55)に現在地へ移り、さらに寛政6(1794)年の普寛の開山後に泰賢が現在の大崎口を開削したことにより、信仰の拠点が六万寺へと移動したためによると思われる。

中世以来の古道とされる大倉登山道は、「八海山」の由来を説明する諸説の一つとなった八つの池がある。大倉口に鎮座する坂本神社は、「八海神社」とも称されており、最古の登拝口とも言われている。

山口からの登山道は、旧道を含め屏風道、生金道、祓川道の3道である。最古とされる祓川道は、弘法大師が弘仁11(810)年に八海山を開山した際の道とされている。このことが史実であるとは考え難いが、少なくとも真言宗による入山があったと考えることができ



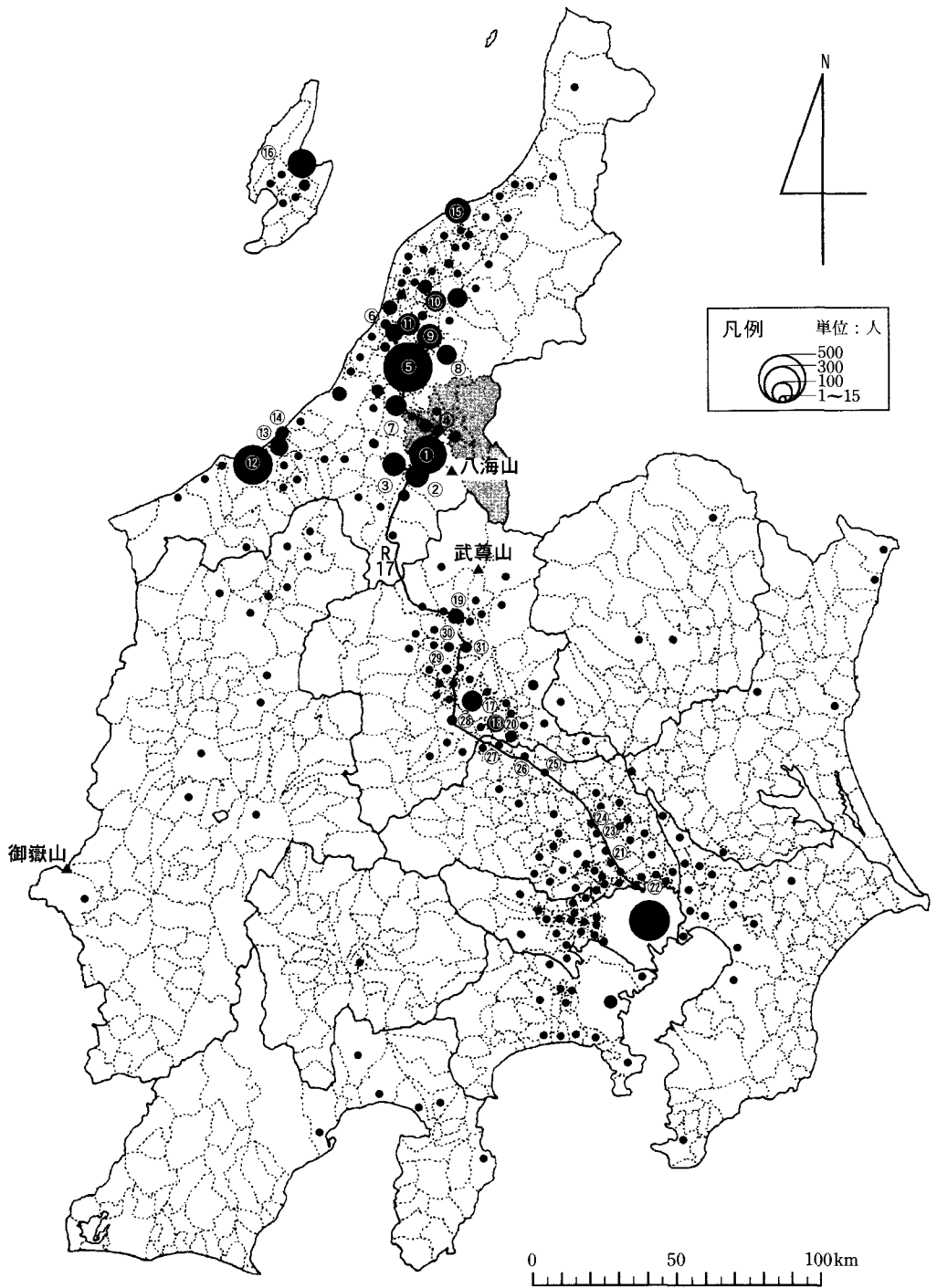


図3 八海山大崎口崇敬者の市町村別分布（関東甲信越および静岡県）  
 注）「八海山大崎口里宮崇敬者名簿」，八海山尊神社社務所，1999  
 図中○数字は，本文Ⅲ-(1)の○数字と対応。

や、長岡市周辺の三島郡⑥に204人、小千谷市⑦95人、栃尾市⑧85人、見附市⑨134人、三条市⑩95人、南蒲原郡中之島町⑪104人と多いことがわかる。他に上越市⑫の333人や中頸城郡頸城村⑬の72人、大潟村⑭の41人といった上越市とその周辺や、新潟市⑮の139人、佐渡⑯(両津市、佐渡郡)の251人がある。

次に群馬県を見ると、前橋市⑰の94人、伊勢崎市⑱の69人、沼田市⑲の57人、佐波郡境町⑳の32人が挙げられる。東京都は、23区で356人を数える。県の合計では崇敬者数が多い埼玉県は、浦和市㉑の16人が最大であり、県内に分散している。

ここで確認できる点は、まず新潟県内においては、新潟市以南と佐渡において卓越していること、また崇敬者の分布が関東にまで広がっていて、崇敬者数の多い新潟県、群馬県、埼玉県の市町村が、中山道および三国街道に沿って続いていることである。順に見ていくと、埼玉県川口市㉒8人、浦和市16人、大宮市㉓15人、上尾市㉔6人、熊谷市㉕6人、深谷市㉖8人、本庄市㉗7人となり、群馬県に入ると、高崎市㉘24人、前橋市94人、渋川市㉙22人、北群馬郡子持村㉚23人、勢多郡赤城村㉛29人、沼田市57人となる。新潟県では、南魚沼郡六日町116人、同大和町302人、北魚沼郡小出町25人、同堀之内町38人、小千谷市95人、長岡市512人、三島郡204人、佐渡250人と続く。それに対して、八海山からの距離では、群馬県や埼玉県、東京都などと同じ程度の東北地方や、富山県、新潟県北部ではほとんど崇敬者の分布を確認することはできない。こうしたことから、行者による布教というものが、信仰の分布を形成する過程において影響している可能性を指摘することができるだろう。

## (2) 大崎口周辺の霊神碑から見た分布

霊神碑は、木曾御嶽信仰と八海山信仰の特色の一つであり、霊神碑建立時には、遺骨、遺髪、遺品等を納める習俗もある<sup>32)</sup>。木曾御嶽や八海山も、他の霊山と同様に、死後における靈魂安住の地とされ、山中他界の観念が現れている<sup>33)</sup>。

霊神碑建立の起源は、近世末期木曾御嶽を民衆に開放した覚明と、同じく木曾御嶽の中興開山を行った普寛の両行者の死後に、彼らの霊を神として、弘化年中(1844~48)頃、御嶽に祀ったことに遡る<sup>34)</sup>。その後、信仰への功績が大きいとされる先達等が亡くなった時も霊神碑が建立されることとなった。霊神碑の建立を許された崇敬者には、霊神号が与えられる。この霊神号は、一般に八海神社によって授与されるが、神社から大先達の免状を与えられた先達も、授与の資格をもつ<sup>35)</sup>。

この霊神碑には、霊神名、建立者名、建立年次、霊神あるいは建立者の出身地等が彫り込まれている。そこで、この大崎口里宮周辺の霊神碑に刻まれている霊神あるいは建立者の出身地から図4と表2を作成し、その分布を表した。これらによれば、都県別では、新潟県出身者が153人、次に東京都の33人、群馬県の29人、埼玉県9人などが多い。市町村別では、新潟県長岡市54人、新潟市28人、上越市8人、大和町6人、群馬県沼田市の13人、伊勢崎市7人などが上位を占めていることが確認できる。さらに新潟県においては長岡市周辺部(柏崎市、小千谷市、見附市、与板町等)での分布が密であることがわかる。また八海山山麓部においても分布が確認できるが、崇敬者数との対比では、むしろ霊神碑の建立が少ないと捉えることも可能である<sup>36)</sup>。

霊神碑は、先達等で信仰に功績を記した人に許可されるが、地元では登拝講を結成する必要がなく、そもそも霊神碑建立は、外部から八海山へ導入された習俗であり、歴史的に

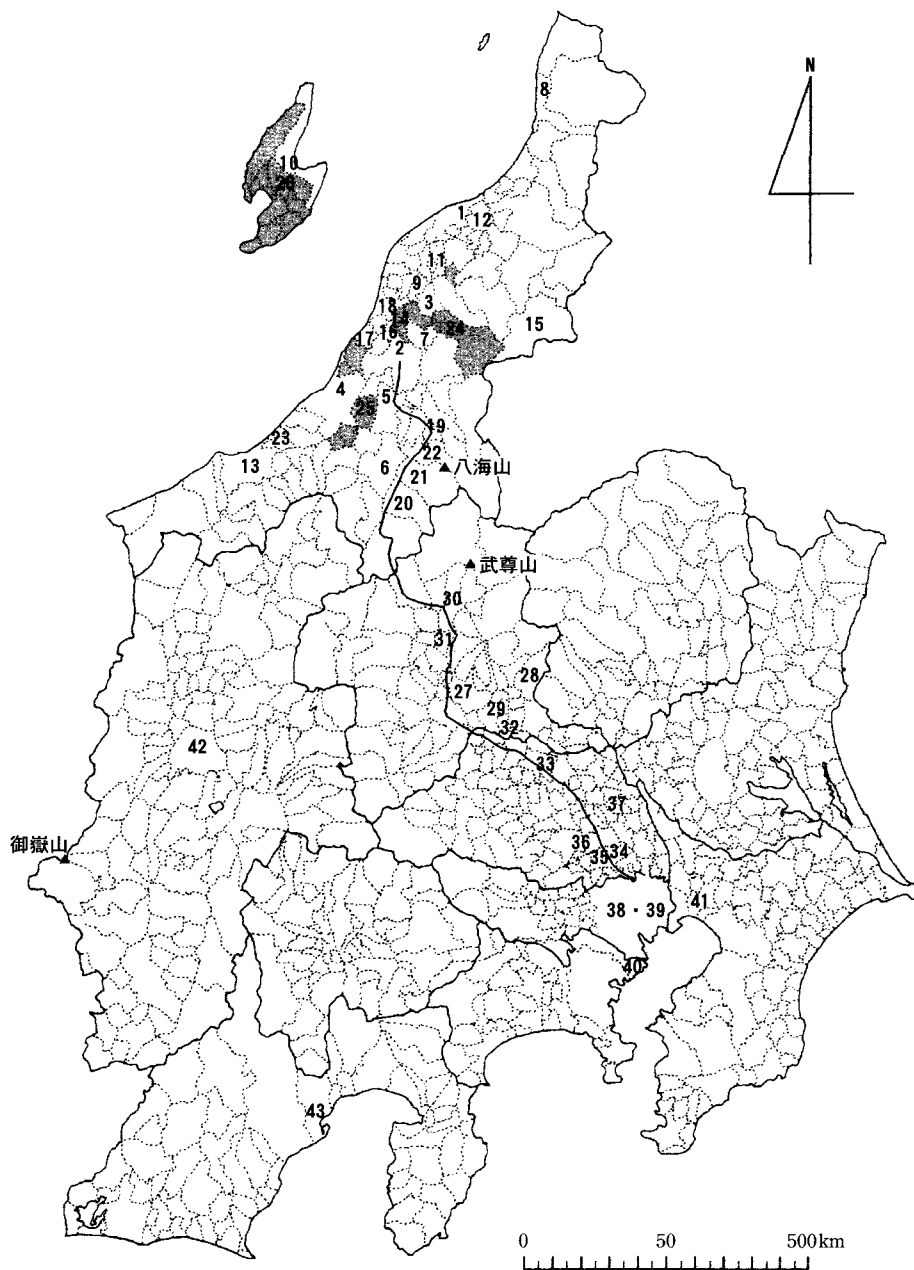


図4 八海山大崎口里宮周辺の霊神碑から見た分布

注) 1999年の現地調査によるデータをもとに作成。図中の数字は、表2のNo.に対応する。網掛部のNo.24, 25, 26は、それぞれ南蒲原郡、刈羽郡、佐渡郡を示す。No.14は、南蒲原郡に含まれる。「八海山大崎口里宮崇敬者名簿」、八海山尊神社社務所、1999



表2 大崎口里宮周辺の霊神碑から見た分布

No.	出身地	人	No.	出身地	人
	新潟県	153		群馬県	29
1	新潟市	28	27	前橋市	3
2	長岡市	54	28	桐生市	1
3	三条市	5	29	伊勢崎市	7
4	柏崎市	3	30	沼田市	13
5	小千谷市	3	31	子持村	2
6	十日町市	4	32	境町	2
7	見附市	4		その他	1
8	村上市	1		埼玉県	9
9	燕市	2	33	熊谷市	1
10	両津市	4	34	浦和市	1
11	白根市	1	35	与野市	1
12	豊栄市	1	36	上福岡市	2
13	上越市	8	37	白岡町	1
14	中之島町	1		その他	3
15	上川村	2		東京都	33
16	与板町	4	38	新宿区	1
17	出雲崎町	2	39	浅草	5
18	寺泊町	2		その他	27
19	小出町	2		神奈川県	2
20	塩沢町	1	40	川崎市	2
21	六日町	2		千葉県	3
22	大和町	6	41	船橋市	2
23	頸城村	3		その他	1
24	南蒲原郡	5		長野県	2
25	刈羽郡	1	42	松本市	2
26	佐渡郡	2		静岡県	1
	その他	2	43	清水市	1

1999年の現地調査による。「その他」に分類されているものは、都県名のみの場合を表す。太字の数字は、都県ごとの合計。No.は、図4に対応している。

も新しいものであるため、霊神碑建立の習俗がもとより見られないのである。山麓部においては古くから生活に密着した八海山信仰が存在しており、近世以降に山麓部外へと浸透した八海山信仰とは異なる性格をもつと考えられ、そのため、崇敬者の分布密度に比べ霊神碑建立のそれが低いと言えよう。

### (3) 八海山信仰に関わる講の分布

次に、八海山信仰に関わる講として、大崎口崇敬者名簿に記載されている講と霊神碑に刻まれている講、『全国神社名鑑』<sup>37)</sup>に記載されている組織を取り上げる。

これらより確認できた講を図表化した図5

および表3より、基本的には八海山山麓を含む半径15km圏内には存在が認められない。八海山山麓の大崎には泰賢講と呼ばれる講が組織されているが、他の地域の講とは異なり、当然ながら代参講ではなく、八海山尊神社で執り行われる行事の手伝い等を行い、大崎口を開削した泰賢を崇拝して作られた講である<sup>38)</sup>。

山麓以外の地域の講については、御嶽教系の講が多いことに気づく。名簿等に記載されている講のうち、御嶽教の名称がついている講および組織のほか、一心講や神徳会もまた御嶽講あるいは御嶽教から派生した講である<sup>39)</sup>。判別できる御嶽教系の講の分布を見ると、新潟県長岡市に多いほか、新潟県においては長岡周辺の三条市や加茂市・佐渡、群馬県では渋川市・佐渡郡境町、埼玉県熊谷市・川口市、東京都板橋区・新宿区が挙げられる。また、八海山信仰に関わる講の分布の特色については、新潟県、群馬県、埼玉県、東京都、千葉県、神奈川県に限り確認できる点にある。木曾御嶽信仰との関連性を考えると、長野県においても組織されていることも予想されるが、実際には組織されていない。

八海山への参詣および登拝については、八海講の場合、主に八朔の日に行われるが、必ずしもそれだけに限るものではない<sup>40)</sup>。御嶽教は、八海山への参詣および登拝は代参ではなく任意の参加である。新潟県長岡市の御嶽講は、明治期より行者が活動しており、八海山や木曾御嶽山へ毎年登拝が行われていた<sup>41)</sup>。神徳会については、7月中に大崎口より登拝し、火渡り大祭にも参加している。また御嶽山にもほぼ毎年登拝するが、いずれも代参ではなく任意の参加となっていた<sup>42)</sup>。

崇敬者の分布に関して、新潟市や長岡市などの分布数の多さは、転居等により山麓から移転したことの反映とも考えられるが、講の分布から、崇敬者の移動による分布への反映というよりも、八海山信仰の布教・浸透によ

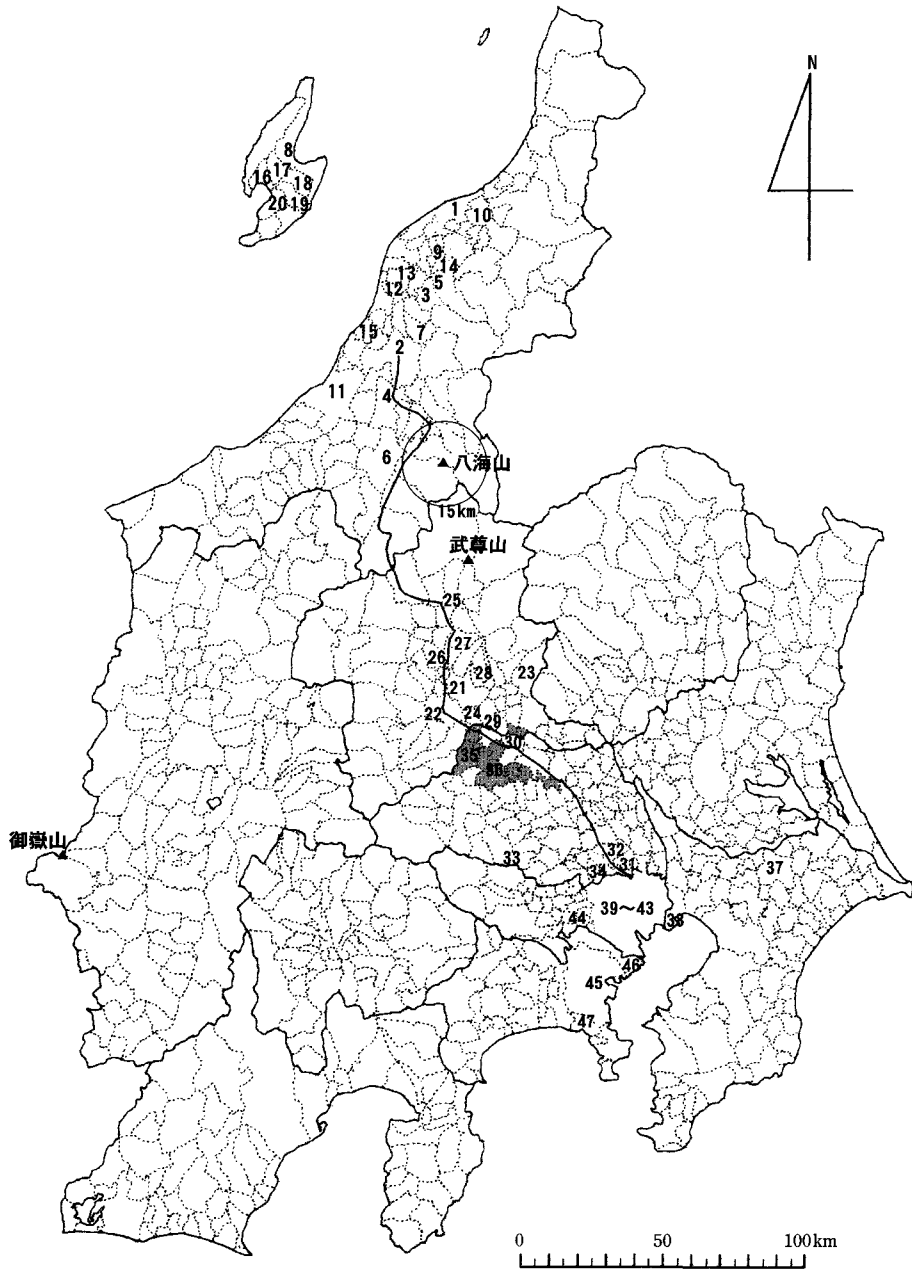


図5 八海山信仰に関わる講・組織の分布

注) 「八海山大崎口崇敬者名簿」, 八海山尊神社社務所, 1999, 『全国神社名鑑 上』, 全国神社名鑑刊行会, 1977, および 1999 年筆者による調査の霊神碑に記載の講より作成。  
 図中の数字は表 3 に対応。

表3 八海山信仰に関わる講

No.	所在地	講名	系	No.	所在地	講名	系	No.	所在地	講名	系	
1	新潟県 新潟市	新潟八海山教会	八	10	豊栄市	知野豊栄講	八	29	境町	境町一心講	御	
		新潟市八海山扶教会	扶	11	上越市	上越市講中(伊倉)	八			丸江一心講	御	
		霊風講	八	12	分水町	加藤講	八			御嶽教群馬県奉賛会	御	
	2	長岡市	大野講	八	13	吉田町	地蔵堂八海講	八	30	埼玉県 熊谷市	御嶽教丸江一心教会	御
			長岡御	御	14	田上町	八海山吉田教会	八				
			御嶽教海心霊風会	御	15	出雲崎町	白根知野講	八			丸玉講	
			御嶽教神祇教	御	16	佐和田町	出雲崎講社	御	31	川口市	御嶽教丸江一心教会	御
			御嶽教八海山神盛会	御	17	金井町	神徳会	八	32	浦和市	優和会	
			長岡一心講	御	18	新穂村	神誓会	八	33	飯能市	普寛中教会	
			不動一心講	御	19	畑野町	野方講中	八	34	朝霞市	神寿教会	
3	三条市	御嶽教愛国泰神教会	御	20	真野町	柴坂講	八	35	児玉郡	優和会		
		神霊会		21	群馬県 前橋市	神誓会	御	36	大里郡	厄除御山神社		
		神徳会	御			神徳会	御			神明講社		
		長岡神明教会				神徳会	御					
		三條正導講社					御	37	千葉県 成田市	丸江一心教会	御	
		三條市神心講				山王講		38	浦安市	新泉講		
		御嶽教八海山本部大教会	御			八海山友の会						
		八海山布教所	八			優和会						
		大淵講	八			福堂講中		39	東京都 板橋区	御嶽教会	御	
		神習教八海山支教会		22	高崎市	優和会		40	江東区	笠原講		
5	加茂市	御嶽教八海山加茂教会	御	23	桐生市	優和会		41	品川区	百合丘講		
		八海山三神教会				八海山友の会		42	新宿区	御嶽山大教普寛大殿教会	御	
7	見附市	八海講	八	24	伊勢崎市	伊勢崎八海講	八	43	目黒区	寺田講社		
8	両津市	両津市八海講	八	25	沼田市	大勝講		44	府中市	大勝講		
		御嶽教両津教会	御	26	渋川市	子持一心講	御					
		神徳会	御	27	赤城村	優和会						
9	白根市	白根海宝会		28	大胡町	アブミ講		47	鎌倉市	百合丘講		

注)『八海山大崎口里宮崇敬者名簿』,八海山尊神社社務所蔵,1999,『全国神社名鑑 上』,全国神社名鑑刊行会,1977,および1999年調査の霊神碑に記載されている講より作成。No.は,図5に対応。八:八海山,扶:扶桑教,御:御嶽教を表す。講の所属(系)は,判別可能なもののみ記載。空欄は,不明を表す。

り拡大していると考えべきである。なぜなら講組織は,一つの講につき講員が10人程度から100人以上と規模は様々ではあるが<sup>43)</sup>,霊神碑に記載されている年代から考慮すると,新潟市や長岡市などの講による霊神碑建立のうち確認できるものに限っても昭和初期のものがあ、講組織というものが講員の間で存続され,ある程度安定したものと考えられ,さらに霊神碑建立に必要な霊神号を受けるのに10~20年といった年月の修行を

要することからも,さらに遡った時期,つまり布教活動が盛んに行なわれていた時代から信仰が維持されてきたと考えられるからである。

#### IV. 八海山信仰の展開と分布要因

八海山信仰の分布として大崎口崇敬者名簿,大崎口里宮周辺の霊神碑,八海山に関わる講の3つの分布から,八海山信仰の分布に関していくつかの特色を前章で確認すること

ができた。まず、八海山信仰の分布が、新潟県、群馬県、埼玉県、東京都などに集中している一方で、新潟県北部や東北地方、長野県、富山県などでは少ないこと、また中山道から三国街道沿いに分布が集中して見られることなどである。ここで考えられる分布の主な形成要因として、木曾御嶽信仰の影響と交通路つまり行者の活動という2つが挙げられよう。そこで、本章では、八海山信仰の展開をふまえ、八海山信仰の大崎口崇敬者の分布に見られる特色を形成する要因について以上の観点から検討することとする。

八海山信仰の展開については、宮家が、霊神碑に刻まれている建立年代から、霊神碑建立の盛んな時期を確認することができるとして、以下の4つの時期に区分している<sup>44)</sup>。建立年代については、表4に示した。

第1期：普寛による八海山開山につぐ幕末の1840～60年頃。

第2期：明治維新後の八海山信仰が再度発展をとげた明治16年から30年頃。

第3期：大正末から昭和初期の関東への拡大期。

第4期：大崎の八海神社を中心とする活動が活発化する昭和36年以降。

第1期以前についてはⅡ－(1)で述べたように、古代の原初的な山岳信仰に始まり、中世に入ると仏教化が進むこととなったが、八海山信仰がどれほどの広がりを有していたのか江戸末期に至るまで確認することができない。そのため、ここでは、近世末の普寛による開山以降の展開について述べることにしたい。

第1期は、寛政6(1794)年の普寛による八海山開山により八海山信仰は大きく展開し、山麓部における各八海神社の活動が活発化した時期である。

第2期は、各地で行者を中心に講が形成された時期であり、大崎の泰賢講もこの時期に

表4 年代別霊神碑建立数

	建立年代	霊神碑数(基)
明治	1～5	1
	6～10	0
	11～15	0
	16～20	15
	21～25	8
	26～30	4
	31～35	2
	36～40	0
	41～44	4
	大正	1～5
6～10		11
11～14		14
昭和	1～5	17
	6～10	28
	11～15	14
	16～20	7
	21～25	1
	26～30	5
平成	31～35	2
	36～40	48
	41～45	2
	46～50	10
	51～55	3
	56～60	5
	61～63	2
平成	1～5	3
	6～10	4
	11～13	2

宮家準編『慶應義塾大学宮家研究室報告Ⅱ 修験者と地域社会—新潟県南魚沼の修験道』、名著出版、1981、231頁をもとに作成。昭和56年以降については、1999年の大崎口里宮周辺の現地調査により追加。

組織された。

第3期になると、それまで山口や藤原の八海神社が積極的に布教活動を行うなど活発な動きを見せていた中、新たに大崎の八海神社が加わり新たな局面を迎え、さらに関東へと八海山信仰が拡大した時期と捉える。

戦後の第4期になると、八海山信仰の最大の拠点は、大崎の八海神社へと移ることとなった。

八海山大崎口崇敬者の分布は、新潟県のほ

か、群馬県・埼玉県・東京都に数多く認められるわけであるが、このことは、江戸を拠点として活動していた普寛が、まず木曾御嶽を開山したことにより、関東一円に御嶽信仰をもたらし、その後、八海山の開山と、それに伴う御嶽講の登拝が起きたためであると言える。

木曾御嶽信仰について簡単に触れると<sup>45)</sup>、まず尾州春日井出身の行者覚明が、天明5(1785)年に黒沢口から登拝し、木曾御嶽の開放を行い、その後、秩父出身で、江戸を拠点として活動していた普寛が、寛政4(1792)年6月に木曾御嶽の王滝口を開き中興開山を迎えた。普寛は翌々年における八海山のほか、武尊山等も開山している。王滝口開削後の御嶽信仰は、普寛が江戸を中心に積極的に信者をまとめ講中を作ったことにより、関東を中心に大幅に分布が拡大したと考えられる。普寛の死後においても、弟子の広山、順明、泰賢などが布教活動を続けたこともあり、御嶽信仰はさらに普及した。このことが民衆の間に御嶽信仰を急速に普及させる要因となっているのである。覚明を師事し結成された覚明系の講は、普寛系の講が江戸を中心に結成されたのに対して、御嶽山麓にまず結成され、覚明の出身地である濃尾平野を中心に関西、四国、九州へと普及していった。

このように、行者普寛が江戸を中心とした関東一円に御嶽講を組織していたことにより、八海山の開山以降は、修行の山の一つとして八海山への御嶽講の登拝が行われるようになったことが、八海山信仰の拡大を生んだ要因の一つと言えよう。八海山信仰に関わる講において、御嶽教系の講が多く見られたこともまた、こうした木曾御嶽信仰の影響によるものと考えられる。明治期以降も、長岡市や佐渡などの地域においても、御嶽行者の活動により八海山信仰が拡大したとされる<sup>46)</sup>。

八海山信仰が展開する以前において既に全国的に浸透・定着していたと考えられる御嶽

信仰の存在が、現在見られる八海山信仰の分布を規定した要因の一つと考えられる。つまり、近代以降でも八海山信仰は、御嶽信仰の普及地域において浸透が容易であったと推察される。

そこで、木曾御嶽信仰の分布を都府県別に見てみる。『全国神社名鑑』<sup>47)</sup>より御嶽教の教会・組織を拾い分布を見ると、全国的に広く分布しているが、ここでは本州東部に限ることとする。図6より、まず愛知県に多く分布していることがわかる。また関東一円にも認められる。新潟県の分布数が42であることにも注目できる。新潟県内における御嶽信仰の分布は、長岡市とその周辺の三島郡に多く分布が見られるほか、新潟市や佐渡、上越市などにもある程度の数が存在している。また『全国神社名鑑』に記載されている御嶽教会の中で、八海山の名がついている教会は、長岡市の御嶽教八海山神盛会、三条市の御嶽教八海山本部大教会、加茂市の御嶽教八海山加茂

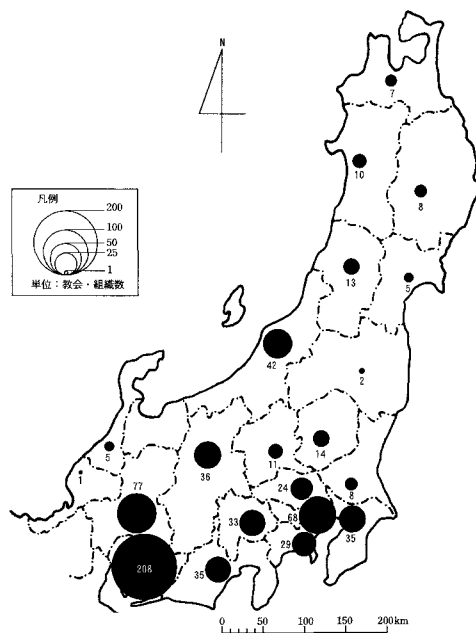


図6 木曾御嶽信仰の教会・組織の分布(本州東部)  
資料：『全国神社名鑑 上』, 全国神社名鑑刊行会, 1977。

教会と、新潟県内のみで確認できる。これらの御嶽教教会の所在地は、大崎口八海山尊神社の崇敬者の数が多い地域である。

しかしながら、八海山信仰の分布は、新潟県、群馬県、埼玉県、東京都、神奈川県、千葉県以外の地域への浸透が弱いことを、Ⅲ章で示した。そうしたことから、八海山信仰が受容される要因として御嶽信仰の有無を挙げるのみでは十分な説明にはならない。また霊山を中心として時間経過とともに、同心円的に広がっていっただけでもないことがわかる。もし同心円的に拡大していくのであれば、東北地方においても八海山信仰がもっと浸透していても良いはずだからである。

そこで、もう一つ分布を規定する要因として前章で挙げた交通路に関して次に検討する。崇敬者の分布のもう一つの特徴として、新潟県、群馬県、埼玉県において、中山道および三国街道（現・国道17号線）沿いに分布の集中が見られた。これは、行者の活動がそうした街道沿いに行われたためと考えられる。そのため、霊山からの距離だけでなく、行者普寛の活動に関わりある場所、拠点も分布に特色を与えているだろう。本庄市は、普寛・泰賢の両者の没した地であり、両者の遺骨を分骨し埋葬しているうちの一つである普寛堂があることから<sup>48)</sup>、信仰の要所と言える。そのため、周辺の群馬県伊勢崎市や佐波郡境町といった八海山信仰が盛んな地域が形成されていると考えることができる。

このように八海山信仰の分布は、八海山から離れるにつれて、崇敬者数も減少していくという単純なパターンに見えるが、分布の形成の過程と要因に関して考察を進めてみると、分布の構造について以下のことが予測できるだろう。すなわち、分布が密である地域が、北部を除く新潟県内、群馬県、埼玉県、東京都に限られる要因として、木曾御嶽信仰の影響が予想される。また、行者普寛の活動が要素となっていることも挙げられる。しか

しながら、木曾御嶽信仰は全国的に広がっているにもかかわらず、上記の四県以外で八海山信仰が浸透していないと言える。つまり、普寛系の御嶽講との関わりとしての木曾御嶽信仰の伝播により、八海山信仰が発展したことを意味している一方で、木曾御嶽からの距離が近い地域には八海山信仰が浸透しなかったと指摘できる。よって、八海山信仰の展開においては、木曾御嶽信仰の影響を大きく受けているが、その影響はあくまで一方的であり、その反対の方向での作用力は小さかったと言える。ここに、複数の霊山の間には、階層性が認められることを指摘しうるであろう。

## V. おわりに

以上、本稿では八海山信仰を対象に、その歴史的背景をふまえ、分布に関して分析してきた。

まず時間経過による分布の整理をしてみると、近世末以前、つまり普寛らによる中興開山以前における八海山信仰の分布域は、中世の仏教化により、越後有数の霊山として発展が見られるわけであるが、その後、近世に入っても長い間賑わうことはなく、近世末以降の普寛ら行者の活躍を勘案すると、それ以前の分布域は八海山麓周辺にとどまっていたと考えるのが妥当であろう。次に、近世末の中興開山から、江戸を拠点として活動していた普寛によって結成された御嶽講が八海山へ登拝することによって、八海山信仰の分布は江戸を中心とする関東へと拡大したと考えられる。その後、霊神碑の建立年代等<sup>49)</sup> から、少なくとも昭和初期においては八海山信仰が埼玉、群馬県に展開していたと言えよう。霊神碑の建立が多い昭和30年代中頃以降は、大崎口の布教活動が活発になったことが要因となっている<sup>50)</sup>。

そして、このような分布が形成された要因として確認できた点は、八海山信仰が近世末以降の信仰の形態や分布において、木曾御嶽

信仰の影響を受けていたことであり、御嶽信仰の浸透は、八海山信仰の伝播・浸透の基盤となっていたと考えられる点にある。しかし木曾御嶽からの距離が近い地域においては、反面、八海山信仰が伝播する上での阻害要因となっていることも示唆される。また、図示した八海山信仰の分布より、普寛ら行者の布教活動が交通路沿いに行われたことが類推され、そのことにより八海山信仰の分布は、中山道および三国街道沿いに見られることとなったと言えよう。さらに、八海山山麓の地元住民による霊神碑建立は稀であり、建立する主体の多くは、新潟県内でも遠隔地や県外に住む崇敬者であることがわかった。このことから、大崎集落や城内地区等の地元の崇敬者とそれ以外の崇敬者との間では信仰形態に差異があると言えよう。その差異が生じたこととなった要因は、地元の崇敬者による信仰が八海山を古代より作神、水分神とする性格を有しているのに対して、遠隔地の崇敬者による信仰は、近世末の中興開山に始まり、木曾御嶽信仰の影響を受けつつ発展した信仰であるからと考えられる。ただし、後者において全ての地域の信仰が、木曾御嶽信仰の影響を受けた信仰とは限らないことも留意すべきである。それは、霊山からの距離だけでなく、信仰の伝播過程とも関わると考えられ、遠隔地とした地域内で隣接する地域間において必ずしも同様の信仰ではないだろうからである。この点に関しては、今後の課題として、各地域の信仰の受容について詳細に検討していく必要があるだろう。もう一つ、八海山と木曾御嶽といったように複数の霊山が互いに関連しながら信仰の空間的広がりを作り立たせているような場合に、各地域においていかに信仰が受け容れられているかも注目すべき問題として挙げておく。

(神戸大学大学院・院生)

#### 〔付記〕

本稿は、2000年1月に新潟大学人文学部に提出した卒業論文を大幅に加筆・修正したものである。

本稿作成にあたっては、国立歴史民俗博物館青山宏夫先生、新潟大学堀健彦先生、神戸大学長谷川孝治先生にご指導を戴きました。調査の際には、山田泰利氏をはじめとした大崎口八海山尊神社の方々、新潟市八海山尊社大橋興作氏にご協力を戴きました。英文要旨は、Colorado大学歴史学部の Marcia Yonemoto 助教授の校閲を受けた。ここに記して感謝致したいと思います。内容の一部は、2002年5月25日の歴史地理学会大会（於・和歌山）にて発表した。

#### 〔注〕

- 1) 信仰圏研究の流れは、金子直樹「日本における信仰圏研究の動向－山岳信仰を中心にして－」、人文論究（関西学院大）45-3, 1995, 104～117頁によって、地理学のみならず民俗学における動向についてもまとめられている。
- 2) 石飛一吉「屋久島における山岳信仰圏の研究」、鹿児島地理学会紀要21-1, 1976, 44～52頁。
- 3) 岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』, 名著出版, 1992, 262頁。同上「戸隠信仰の地域的展開」、山岳修験10, 1992, 31～40頁。
- 4) 松井圭介「信仰者の分布パターンからみた笠間稲荷信仰圏の地域区分」、地理学評論68 A-6, 1995, 345～366頁。
- 5) 金子直樹「岩木山信仰の空間構造－その信仰圏を中心にして－」、人文地理49-4, 1997, 311～330頁。
- 6) 三木一彦「秩父地方における三峰信仰の展開－木材生産との関連を中心にして－」、地理学評論69 A-12, 1996, 921～941頁。同上「江戸における三峰信仰の展開とその社会的背景」、人文地理53-1, 2001, 1～17頁。
- 7) 前掲1), 114頁。
- 8) 木喰行者とは、木の実や果実を食べ、米や野菜を常用しない修行である木喰戒を守る僧の総称を言う。
- 9) 鈴木昭英「富士・御嶽と中部霊山」（鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』山岳宗教史研究叢書9, 名著出版, 1978, 2～24頁）。

- 10) 主な研究としては、①鈴木昭英「八海山信仰の展開」(新潟県教育委員会編『新潟県文化財調査報告 第15集 南魚沼』, 1977, 402~410頁)。②鈴木昭英「八海山信仰と八海講」(鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』山岳宗教史研究叢書9, 名著出版, 1978, 434~486頁)。③宮家準編『慶應義塾大学宮家研究室報告Ⅱ 修験者と地域社会—新潟県南魚沼の修験道』, 名著出版, 1981, 294頁。④山崎久雄「越後三山地域の八海山信仰」(日本自然保護協会調査報告 第34号『越後三山・奥只見自然公園学術調査報告』, 財団法人自然保護協会, 1968, 243~259頁)などがあげられる。宗教学からは、⑤松本皓一「越後八海山信仰調査の中間報告—実体と今後の課題」, 宗教学論集8(駒沢宗教学研究会), 1974, 29~50頁などがある。
- 11) 前掲10) ②。  
 12) 前掲10) ③。  
 13) 前掲10) ②, ③を参照。  
 14) 児玉允「木曾御嶽の霊神碑」(鈴木昭英編『山岳宗教史研究叢書9 富士・御嶽と中部霊山』, 名著出版, 1978, 187~201頁), および前掲10) ②を参照。  
 15) 『八海山大崎口里宮崇敬者名簿』, 八海山尊神社社務所。1999年11月の調査時の名簿を用いた。八海山尊神社山田泰利氏によると『八海山大崎口崇敬者名簿』に記載されている崇敬者には、神社直結のタイプと、先達・行者・世話人などの代表者のみの記載の場合と、それ以外のタイプ(一度来たのみの場合も含む)があると言い、その区別はされていないと言う。  
 16) 前掲15) の名簿に記載されている講と、『全国神社名鑑 上』, 全国神社名鑑刊行会, 1977に記載されている教会等を用いた。  
 17) 大和町史編集委員会『大和町史 中巻』, 新潟県南魚沼郡大和町役場, 1991, 875~877頁, および前掲10) ②, 463頁を参照。  
 18) 前掲10) ②, 464~470頁, 前掲17) 893~894頁。  
 19) 帰依信仰であることから、験力が優れている山伏ほど、民衆からの信仰は厚いものとなる。  
 20) 前掲10), 443~444頁。  
 21) 前掲10) ②, 443頁, 同③, 223頁。  
 22) 前掲17), 888頁。  
 23) 前掲10) ②, 444頁。  
 24) 前掲17), 972~973頁を参照。泰賢は、普寛による開山の後の寛政10(1798)年に、現在の里宮の脇にある霊窟で塩断・穀断の木喰修行を行い、享和3(1803)年には大崎口登山道の開削に着手したとされている。  
 25) 五来重編『山岳宗教史研究叢書17 修験道史料集 [1]』, 名著出版, 1983, 502頁所収。  
 26) 登山道については、前掲17), 936~964頁を参照。  
 27) 前掲10) ②, 442頁, 前掲17), 891~892頁。  
 28) 前掲10) ②, 454~456頁。  
 29) 前掲10) ②, 454~456頁。  
 30) 前掲10) ②, 459~460頁, 同③, 227~229頁。  
 31) 前掲10) ②, 440頁, 前掲17), 876~877頁。  
 32) 前掲10) ②, 473頁, 前掲14), 193頁。  
 33) 前掲10) ②, 471頁, 前掲14) を参照。  
 34) 前掲14), 188頁。  
 35) 新潟市八海山尊神社宮司大橋興作氏からの聞き取りによる。  
 36) 大和町出身者の霊神碑6基のうち、少なくとも2基は八海山尊神社山田家建立の霊神碑であり、崇敬者302人に対し霊神碑4基(1.32%)となる。  
 37) 『全国神社名鑑 上』, 全国神社名鑑刊行会, 1977。  
 38) 前掲10) ③, 233頁。  
 39) 神徳会は、昭和25年に長岡の行者が御岳教から派生し組織した。一心講の起源は、武蔵国出身の御岳行者一心が、江戸を中心に、武蔵, 上野, 下野で組織した講である(長岡市編『長岡市史 別編 民俗』, 1992, 517頁)。  
 40) 例えば、群馬県子持村の場合10月20日の火渡り大祭の時、募集により参る(子持村誌編さん室編『子持村誌 下』, 1987, 986頁)。同じく群馬県境町の場合は、毎年8月7日ごろ希望者を募り参拝・登山した(群馬県教育委員会編『境町の民俗』群馬県民俗調査報告 第5集, 1964, 129頁)。  
 41) 長岡市編『長岡市史 別編 民俗』, 1992, 517頁。  
 42) 長岡市編『長岡市史 別編 民俗』, 1992, 518頁。  
 43) 八海山尊神社山田泰利氏の話による。  
 44) 前掲10) ③, 231~237頁。  
 45) 木曾御嶽信仰の概略については、宮田登



「近世御岳信仰の実態」(鈴木昭英編『山岳  
宗教史研究叢書 9 富士・御岳と中部霊  
山』, 名著出版, 167~186頁)を参照。

- 46) 前掲 10) ③, 231~237頁。
- 47) 前掲 37)。
- 48) 前掲 17), 970~973頁。
- 49) 霊神碑のほか, 「八海山城内口案内組合誌」  
(池田亨「八海山火渡祭—八雲流三段法—」,  
高志路 231, 1974, 3~5頁)に,  
「昭和五年四月日本山岳会登録

(中略)

登山案内信者地方名

東京都, 神奈川県, 埼玉県, 群馬県, 栃  
木県, 長野県, 愛知県, 新潟県一円

とある。

- 50) 山田泰利氏(八海山尊神社)によると, 一  
つの登拝集団が, 大きいもので100~200名  
にも上ったという。一人毎年一回は夏山に  
登拝していたという。

## The distribution and development of the religious worship of Mt. Hakkaisan

SAKANO Yusuke

In Japan, mountains have been worshipped as gods from ancient times to the present. The purpose of this paper is to understand the geographical distribution and development of worship of the sacred mountain Mt. Hakkaisan in Niigata prefecture. One of the turning points of the Mt. Hakkaisan belief came at the end of the Edo era. It begins with the ascetic Fukan's founding of a Mt. Hakkaisan cult in 1794. Before the foundation of this cult, the worship of Mt. Hakkaisan was limited to the area at the base of the mountain itself. After the foundation, the belief in Mt. Hakkaisan spread. However, the geographical spread itself has some significant features. One is that the spread of Mt. Hakkaisan belief to the Kanto region is conspicuous, and that the spread follows the Mikuni highway connecting the city of Edo (now Tokyo) to Echigo province (present-day Niigata Prefecture), where Hakkaisan is situated. The key factors in this spread are the influence of Mt. Kiso Ontake belief and the road system. Regarding the influence of Mt. Kiso Ontake belief, the similarity between Mt. Hakkaisan belief and Mt. Kiso Ontake belief is shown; this is due to the historical evidence that the ascetic Fukan founded Mt. Kiso Ontake before he founded Mt. Hakkaisan belief. Mt Kiso Ontake believers who also went on to climb Mt. Hakkaisan would have encouraged the penetration of Mt. Hakkaisan belief into the Kanto region. By contrast, it is also possible to argue that the influence of Mt. Kiso Ontake belief became an obstruction to the spread of Mt. Hakkaisan belief because Mt. Hakkaisan belief never penetrated into the area around Mt. Kiso Ontake itself. On the basis of these findings, one can point to the development of a hierarchy among the sacred mountains. Secondly, regarding the importance of the road system, because the ascetic Fukan and his followers engaged in missionary work along the Mikuni highway which links Echigo to Edo, it is possible to say that the distribution of mountain worship followed the highway route.

**Key words:** mountain religion, distribution of belief, ascetic, Mt. Hakkaisan